

「生物多様性勉強会」開催レポート

産官学の連携による国際ルール形成への貢献を目指して

編集部

1. 開催の背景と目的

2025年11月、慶應義塾大学 Keio STAR & サステナブルファイナンス研究センター（幹事：森田香菜子准教授）主催，日本規格協会共催による「生物多様性勉強会」の第1回会合が日本規格協会において開催された。

生物多様性は、企業活動において、気候変動、サーキュラーエコノミーと並んで、持続可能な企業活動における不可欠な課題となりつつある。生物多様性への対応をめぐるのは、評価手法の乱立とローカル性という、気候変動と異なった側面がある一方、気候変動と生物多様性のシナジーなどが注目されており、連携した検討も必要となっている。

現在、気候変動においても、排出量のカウント方法が国際標準として議論になっているが、生物多様性においてもその評価方法に関する戦略的ルール形成の重要性が増しており、欧州は法律と標準を一体化して、ルール形成を進めている。日本としても、日本の技術やデータに基づいた物差しを国際標準に発信していくことが重要となっている。

このため、日本規格協会は、この分野でグローバルなフォーラムで取組をされている慶應義塾大学の森田香菜子先生と連携して、産学官の連携のもと、生物多様性分野の国際ルール形成に、先駆的に取り組むための調査を始めている。

生物多様性は、単に生態学のみならず、自然資本、自然への投資など、幅広い論点に対応する必要がある。そのため今回の勉強会は、アカデミアではIPBES関係者やファイナンスの専門家、さらには国の研究機関の関係者も関わるなど幅広い分野をカバーしており、企業側も環境分野に熱心な取組を行っている企業の方々が参加している。

本稿では、勉強会において議論になっているいくつかの項目について、紹介するとともに、4月に予定される企業の担当者の方々向けの公開セミナーについて紹介する。

2. 勉強会における主要な論点と討議内容

本勉強会は、科学的知見に基づいた実効性のある国際ルール形成への提言、及び社会システム変革のあり方を議論している。

(1) 11月11日の会合では、標準化の動向、国際交渉の推移、及びサステナブルファイナンスの観点から三つの話題提供が行われ、活発な議論が交わされた。

- ① 国際標準化の動向について、日本規格協会の堀より、生物多様性に関するマネジメント規格 (ISO 17298) の成立や、各セクター別の標準化の動きを紹介し、生物多様性の国際ルールを検討する際の留意点が紹介された。

- ② グローバル規範から実務への波及について、電力中央研究所の富田氏から、昆明・モントリオール生物多様性枠組（GBF）などの国際合意が、どのように企業のルールへと落ちてくるのか、その経路が分析された。
- ③ サステナブルファイナンスと社会変革について、慶應義塾大学の森田氏から、IPBESの報告書などを基に、ファイナンスの視点から見た生物多様性保全の促進における課題と可能性について共有された。

(2) 1月14日に開催された勉強会では、「サプライチェーンにおける生物多様性」について、発表と討議が開催された。このテーマの課題として、業種によって企業のサプライチェーンにおける生物多様性に与える影響やその対応は異なること、それに対処する上で制度ができないと取組が進められないのか、認証、ラベル以外のアプローチがあるかについて、企業で抱える課題を基に議論が行われた。

- ① 認証、ラベルについて、日本サステナブルラベル協会の山口氏から、様々な環境ラベル、認証制度が生物多様性保護をその目的にしており、実際、そうした認証をとった製品のほうが生物相を豊かにしている事例が紹介された。
- ② 企業の取組について、住友林業の喜多氏、大成建設の鈴木氏から、事例の紹介があった。
- ③ JIRCASの飯山氏から、バイオエコノミーの最近の動向について紹介があった。

(3) 2月10日に開催された勉強会では、「エネルギー分野における生物多様性への対応」について、発表と議論が行われた。現在、メガソーラーの自然環境への問題が話題になっているが、エネルギー（化石燃料から再エネまでを含むすべて）は、生物多様性に大きな影響を及ぼす産業としてグローバルなレポートで指摘され、注目されている。また、気候変動との一体的な議論も重要となっている。

- ① エネルギー別の生物多様性へのインパクトについて、WWFジャパンの市川氏から、WWFのレポート¹⁾に記載の各エネルギー別の生物多様性への影響が紹介された。
- ② その後、エネルギー産業（供給者）からの話題提供（環境アセス制度や気候変動との比較における生物多様性の政策の方向など）、NEC岡野氏（需要者）からの話題提供（再エネ電力の生物多様性への影響を事業者として認識できる認証などの可能性について）が行われ、活発な議論が行われた。

3. 今後の課題と展望

今後本勉強会で深めるべき課題として以下のトピックが挙げられる。

生物多様性に関する企業としての取組の開示：
生物多様性の企業への取組については、すでに、TNFDのフレームワークがあり、多くの企業がこれを踏まえた情報開示を行っている。他方、こうした取組を投資家がどのように評価するのか、という視点が必要になっている。その際、どのような基準や規格を参照すればよいか、という議論が進むと思われる。

サプライチェーン評価の基準作り：製造業の多い日本にとって、自社地だけでなく海外のサプライチェーン（スコープ3相当）における自然への影響をどう評価し、管理するかという視点が重要である。その場合、気候変動におけるSCOPE3までを含めた国際標準の枠組みなどが参考となりうるか、議論が進むと思われる。
実務と科学の橋渡し：原料や再エネの「調達リスク」という切実なニーズに対し、必要な認証、また、それを客観的に評価する手法について、アカデミアが持つ生態学的評価手法をいかに実用的なツールとして適合させるかの議論が必要である。

生物多様性と気候変動のシナジー：生物多様性と気候変動との対策は重なる部分も多い。そうした議論の統合やシナジーについても、気候変動分野の社会科学の研究との連携や事例の集積によって明確化していく議論が望まれる。

4. 今後の予定

本勉強会は、今後も定期的に開催され、上記の議論やネイチャーポジティブ投資などの個別テーマを深掘りしていく予定である。

また、4月には、勉強会の結果の紹介を兼ねて、公開セミナーの開催が予定されている。そのほか、グローバルな取組への発信のために国際機関と連携した活動も予定されている。

これによって、産官学が、共通の理解のもとに議論し、その成果を政策提言や国際標準化プロセスに反映させることで、日本発のイニシアチブを世界に示していくことを目指している。



勉強会の様子

■ 注

1) Nature-safe Energy: Linking energy and nature to tackle the climate and biodiversity crises



最新発行リストを中心に国内外の規格に関する情報を提供しております。
左のQRコードより、以下のリストのPDFをご提供しています。

※QRコードを読み込みますと、ZIPファイルが開きます。
こちらを解凍してご利用ください。

1 最新 JIS のリスト	5 BS 規格発行情報
2 近日公示予定 JIS のポイント	6 DIN 規格発行情報
3 ISO 規格発行情報	7 ASTM 規格発行情報
4 IEC 規格発行情報	

 標準化で、世界をつなげる。
JSAGROUP
日本規格協会グループ SINCE 1945